

(研究部門)

「体育の授業や遊びを通して運動に親しむ子どもを育てる」

一心も体も動き出す体育の学習を目指してー

大阪市立晴明丘南小学校 坂田智紀

1. 研究主題設定の理由

本校では、「豊かな人間性とたくましく生き抜く力をもった子どもの育成」を学校教育目標に掲げ、心身ともに健全な子どもの育成を目指して日々教育活動を進めている。

昨年度、「運動習慣の定着が不十分で体力の低下が見られる」ということと、「自己肯定感が低く集団での関係づくりが未熟」ということが本校の課題であった。そこで研究教科を「体育」とすることで「子どもたちの体力の向上」と「集団育成」を相互に高め合いたいと研究を始めた。

昨年度の研究では、個に応じて練習できる場を設けたり、ルール(規則)を学級で話し合いながら作り上げたりすることで子どもたちは意欲的に取り組むことができた。また、体育科の学習を学級経営と関連付けて行うことで、友だちの頑張りを認めたり励まし合ったりするなど好ましい学習集団が作られてきた。

しかし、運動が得意で意欲的に取り組む子どもと、運動が苦手で、すぐにできないと感じて諦めてしまう子どもとの二極化が依然として課題として残された。そこで、本年度の研究主題を「体育の授業や遊びを通して運動に親しむ子どもを育てる～一心も体も動き出す体育の学習を目指して～」と設定した。

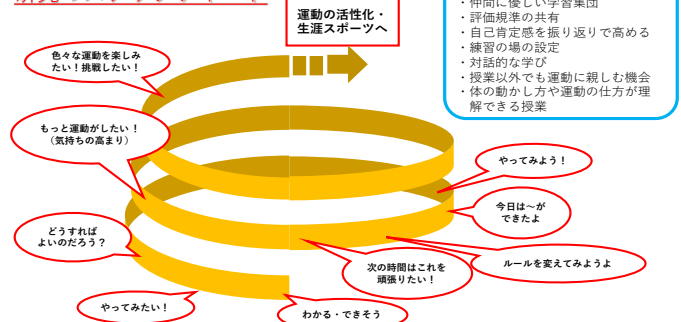
2. 研究の趣旨

研究の主題に迫るため、子どもの意識の高まりを右のようなステップチャートと仮定した。

このスパイラルを回すエネルギーを、体育の授業に組み込むことで、運動が苦手と感じている子どもたちが目を輝かせて取り組める「わかる・できそう」と思える体育科の授業の構築を目指した。同様に、授業以外でも思わず運動がしたくなる環境づくりにつなげられるようにした。

本校では、「ミナミンピック」と称した運動に親しむ取り組みを継続して行っている。「マット週間」や「跳び箱週間」を体育の学習時期と合わせたり、スモールステップで示したカードを作成したりと児童の意欲を高める取り組みも継続して行った。

研究のステップチャート



3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点①授業づくりーできそう、やりたいと思える授業ー

○ 学習資料・技カード、学習カードを活用することで児童が主体的に課題解決できるようにする。

- 評価規準を明確にし、児童の自己評価、児童同士の評価、指導者評価を一体化させる。そうすることで児童の活動意欲の高まりを目指す。
- 仲間と教え合い励まし合いながら運動することの楽しさを実感させるため、対話的な学びの場を設定する。また、性別や技能、人間関係を考慮した均質なグループ編成を行う。
- 児童が学習のめあてをもって、楽しく運動に取り組めるよう、めあてや課題を確認する場、スモールステップに分けられた個々の課題を練習する場、児童の実態や運動の特性に合ったルール（規則）作りの場、次時につながる振り返りの場を設ける。
- 相手の気持ちを考え、友達のよさや頑張りに目を向けることで豊かな人間関係を築ける「仲間にやさしい学習集団」を目指す。

視点②環境づくり—思わず運動したくなる「時間・空間・仲間」—

- 運動委員会がドッジボール大会などを企画し、大会に向け学級で取り組めるようにする。
- 児童集会でたてわりの「みなみん班」で綱引き大会や鬼ごっこなどの外遊びができるようにする。また、短縄や大縄の練習に取り組めるようにする。
- 運動への意欲を実現する場として、放課後に阪南中学校のクラブ活動を本校で体験したり、ダンスの出前授業後に講師とダンスを楽しんだり、バスケットやバレーボールを楽しんだりする「アフター・スクール・クラブ」を計画する。

視点③カリキュラムマネジメント—環境づくりを実現させる体制づくり—

- 年間計画を見直し、マットや跳び箱の単元の実施時期をそろえる。単元の実施時期に合わせ、ミナミニック週間としてマット週間や跳び箱週間の実施を計画する。
- 外で遊ぶ時間や、ミナミニックのマット週間や跳び箱週間での練習時間が確保できるように校時の見直しを行う。（20分休みを午前と昼休みの2回設ける）
- 学校全体で時間割を編成することで、体育の学習においてTT体制がとれるようにする。T1とT2の間で連携を密に取り、情報共有をすることで、児童一人ひとりの頑張りに気づき、成長に合わせ、きめ細やかな指導ができるようにする。

4. 研究の成果と今後の課題

（1）研究の成果

- 「できそう」「やりたい」と思える授業を目指し、授業研究を重ね授業改善を行っていくことで、体育の学習が好きと答える児童の割合が増えた。
- 授業の中で、運動のポイントを板書したり、児童の考えたコツを全体で共有したり、タブレットを使って自分の動きを客観視したりするなど「分かる」体育の授業づくりに取り組んできた結果、体の動かし方やうまくなるためのコツが分かったと答えた児童の割合が増加した。
- 児童同士の称賛の声を全体に広げたり、具体的なアドバイスの仕方を全体で共有したりしてきた結果、友達と教え合って運動ができたと思える児童が増加した。

（2）今後の課題

- 基本となる運動と主運動とのつながりを意識した授業づくりを進める。
- 年間指導計画を、6年間を見通して運動の特性や保健との関連を踏まえられるように改善する。また、単元のねらいや学習内容を明確にする。
- 集団作りと関連させた運動に親しむ児童を育てるための授業改善を今後も取り組む。